

みんゆう 随想

別に「蝶^{ちようゆう}だけが唯一の友達」などという寂しい意味合いのタイトルではない。これは蝶を趣味とする仲間という意味である。

これまで、随分とあちこちで網を手に蝶を追い回してきた。サラリーマン時代は転勤族で沖縄から北海道まで、楽しい昆虫採集を満喫してきた。インド、ネパール、シンガポール、タイ、台湾などへの海外出張では必ずトランクの中に網を忍ばせていた。中でも富士山測候所の脇や38度

渡辺 浩

石川町・ワタコギター
ミュージックスクール代表



線(朝鮮半島)板門店の鉄格子の前での採集はスリル満点であった。どんなに山奥深く、どんなに辺境の地であっても、必ず網を握った同属の仲間に出会うわけで、初対面でありながらさっそく情報交換が始まる。

蝶友 ちようゆう

「あれ? 去年もここで会いましたよねえ、ではまた来年」あれ? 前に石垣島で会った方ですよねえ、奇遇ですねえという偶然は割と普通に発生することになる。そして「えっ? ○○さんを知ってるんですか」と二人の間に共通の知人を発見するのも

常である。そんな偶然から長いお付き合いが始まることも珍しいことではない。「蝶友」が全国に散らばっているのもそんな理由からである。そんなこんなで出会った人たちの職業構成も様々である。大手企業のお偉いさんや

医師、歯科医、教師、僧侶など、先生と呼ばれる人種がなぜか多い。そういえば、私もギターの先生である。たぶん、職場での彼らはそれなりの威厳を保ち、それらしい顔で毎日仕事をしているのであろうが、いったん網を握るとすぐに少年の顔に戻

る。仲間を酒を飲むと昆虫の話以外はあり得ないし、両手を広げて「虫」について熱く語る。そして誰もが「虫仲間」の酒が最高だよねえ」と目尻を下げる。全国どこへ行っても、この光景は間違いなく展開されているはずである。

このような姿を見て世間では「奇人・変人」と言っらしい。毎年一度、県南地域の「昆虫大好き中年」が我が家に集り酒を囲む。全員が筋金入りのツワモノ揃いである。特に、白河市の水野谷氏は一昨年、赤面山で新種の甲虫を発見し、遂に念願だった学名に自分の名前を命名するという快挙を80歳を過ぎて成し遂げたのである。そんな昆虫学者

たちに囲まれながら、新たな刺激を受けつつも更なるライバル心をメラメラと燃やすのである。誰がどのようにして調べたのかは定かではないが、私と同類の「蝶屋」は全国に約1万5千人も存在するらしい。

しかし、私が最年少に近いとしたら、この人口も減少はしても増えはしないようだ。その絶滅も近いかもしれない。一度この世界を味わった者は、生涯「虫の虜」になることは諸先輩方を見ていると歴然としている。その間、「蝶友」として体力と情熱が続く限り、旨い酒を酌み交わすことになる。80歳までガンバロ